

No. 870

さようなら万国博

—大 阪—

人類の進歩と調和のテーマのもとに開かれた日本万国博は、9月18日、183日間にわたる会期を終え、幕を閉じた。

一兆円にのぼる巨費を投じて77カ国の参加のもとに開かれた日本万国博は、史上最大の入場者数を記録した。6,422万人。日本人の10人に6人はみたことになる。この日本万国博は日本に、日本人に何をもたらしたのだろうか。

酷暑のなか、延々4、5時間に及ぶ立ちんぼ行列は、いたましいかな死者を出した。

また大国と低開発国との格差は埋められなかった。更に経済と人間生活、科学技術と人間生活の間に生れた矛盾を追及するねらいも「国威発揚と産業博」にすりかえられ、批判の声すら聞かれた。しかし日本人にとって貴重なこの体験は、日本の将来にいつか生かされることであろう。

会場の灯は静かに消え、1976年アメリカフィラデルフィヤ万国博に引きつがれる。それまでさようなら万国博

老後をゆたかに

老人の孤独な死が連日伝えられる今日、また「敬老の日」がやってきた。厚生省の調査によれば65歳以上の老人が730万人いると言われるが、やがてこの数字は「少産少死」のあおりを受け3倍にふくれあがるという。老人ホームの収容人員がわずか1%しかないという行政の遅れもさることながら、核家族化の中で老人の居所はますます狭くなっていく。

子供との同居を求めつつも一人寂しく三疊のアパートに暮らす老人、寝たきりの体に涙を流す老婆、力のなえた彼等は今何を考え、何を支えに生きようと言うのだろうか。年間(43年)4,600人もの老人が自からの生命を自から殺していく……。